

聖日集会 聖書講筵

「主は我が牧者」

——ラザロの復活 ヨハネ伝11章、詩篇23篇——

1993年1月17日（京都）

奥田 昌道

主の愛の臨みのぞ方 病めるラザロとその姉妹 主にある生命いのちは永遠 ラザロの復活
生命の御霊の法 神の作品 主は我が牧者なり

●主の愛の臨み方

さきほど司会者が証言して下さったように、私たちは主さまに捕ま^{つか}えられています。
主のみことばが——讚美歌もそうです——私たちを捕まえて離さない。そして必ず、そこ
に何かを成し遂げていく力をもっている。

そういうことを思います。そして、それが外^{ほか}ならぬ我々一人ひとりを捕まえ、我々を通して、
我々を用いて、そういうことをなさつて下さいます。本当に主の愛というのはもの
すごいものです。主は我々を捕まえて離さない。私が何かではない、主は我が牧者であつて、
私が信じるからとかではない。一ぺん、この人と思つてその愛が臨んだら、もう、それは
変わらないのです。

皆さん、人を愛されるとき、そのような角度で愛されたら、それは本物です。自分のこ
とを思つていてくれるからその人のことを思うとか、こちらが愛しているから向こう
も答えてくれる、というのは人間の常なのです。それはやむを得ない。しかしながら、
そのような愛は、もしそうでなかったらどうしようとかいうふうに、相手の心や姿がとて
も気になる。しかし、そこを突き抜けたら、相手はどうだってよい。私があの人を愛した。
私があの人のために祈つた。そうしたら、相手がどちらを向いていようと祈りは貫かれる。
それが神の愛だとわかるのです。我々は、

「汝ら互いに相愛^{あい}せよ」

というみことばをいただきました。そのみことばの源は何かといえは、

「私「主イエス」があなただを愛したように」

「父が我「主イエス」を愛されたように」

ということ。神様の愛はものすごく大きい。主さまはそれに100%答えられた。そして、
その主さまの中に宿った愛で、今度は一人ひとりを愛して下さいました。神様はイエス・
キリストだけを愛されたとしみましょう。イエス様は我々一人ひとりに対して同質の愛で愛
し、あの二匹の魚、五つのパンが五千人、一万人の人にゆき渡つてなお溢^{あふ}れたように、豊



かな愛をもって臨んで下さいました。

主さまの愛というのは、こちらがこんなにたくさんなのだから分散して小さいだろうと、絶対に思わないで下さい。あなたという一人に対してものすごく臨む。主の愛が臨んでいるのです。その愛の臨み方は、

「お前を捕まえた。もうここからどんなにもがいても、漏れることはないから、観念しなさい」

との迫りです。これが病気だったら、大変ですよ。それこそ、いろいろな病気があります。もう、一ぺんその病気に捕まったら、どんな医学をもってしても助からないという、死に至る病があります。イエス様の愛というのは生命に至らしめる本当の愛なのです。それを本当に皆さん、体で味わっていただきたい。もし、自分で味わえないならば、そのような角度の愛で人のことを思ってください。愛は己を求めないといえますね。

「愛は信じ抜き、望み抜き、担い抜き。愛は永遠に変わることなし。愛はいつ

までも絶えることなし」（コリント前13・5）

です。我々がいつまでも主さまの愛で、その眼差しで人を見、人の中に最善がなりますようにと祈っていく愛は決して不純でも何でもありません。利己的な愛ならば、いろいろ間違いを犯したり、また問題を起こしたりいたします。しかし、主さまのご愛というものはそんなものではありません。私になぜ、そんなことを言うかといえば、人のことを思うという体験を通して今度は主さまのことが分かってくるからです。親が子育てをしますね、子育てを通して主の愛が分かってくる。また、若い方々が人を愛する。そのために自分がずたずたになることもある。それを通して本当に主さまの愛というのは、どんなにすごい愛かということが分かってきます。

すべてそのような生活の中の体験から、主さまの語っておられることや主さまのお姿が見えてくる。私はそう思っています。

●病めるラザロとその姉妹

今日の題は「主は我が牧者」ですが、ヨハネ伝第11章のラザロのところをお話したいと思います。ヨハネ伝に出てくるところとルカ伝に出てくるところでは、ちょっと記事が食い違っています。むしろ、二つを切り離して、ヨハネ伝はヨハネ伝として受け取りたいと思います。ルカ伝10章38節では、「マルタは多くのことを思い煩っている」と言われた。そして「マリヤはじつと主のみことばに聴き入っていた」とあります。しかもルカ伝では、それは主が十字架の待っているエルサレムに向かって歩んでおられるという場面の中です。ヨハネ伝ではこのラザロを甦らせたというお話があつて、それからしばらく経って、12章に、今度は過越の祭りの六日前にベタニヤにおいて、そこでマルタとマリヤ、ラザロが出てくるわけです。そして



「マリヤは価高きナルドの香油を持ち来りて、イエスの御足に塗り、己が頭髮にて御足を拭いしに」（ヨハネ12：3）

と出てきます。ルカ伝ではそういう場面は出てこない。じつとみことばに聴き入っていたところだけ出てきます。

「ここに病める者あり、ラザロという、マリヤとその姉妹マルタとの村ベタニヤの人なり。此のマリヤは主に香油をぬり、頭髮にて御足を拭いし者にして、病めるラザロはその兄弟なり」（ヨハネ11：1～2）

ベタニヤの村にラザロという兄弟、それからマリヤ、マルタという姉妹の三人兄弟の家があり、主はこの三人をととても愛しておられた。ラザロ、マリヤ、マルタ——その中でも特別にマリヤを愛しておられたような気がしてならないけれど——この三人をととても愛しておられた。それで、ラザロが大変重い病気でありました。

「姉妹ら人をイエスに遣わして『主、視よ、なんじの愛し給うもの病めり』と言わしむ。これを聞きてイエス言い給う『この病は死に至らず、神の栄光のため、神の子のこれに由りて栄光を受けんためなり』イエスはマルタと、その姉妹とラザロとを愛し給えり。ラザロの病みたるを聞きて、その居給いし処になお二日留り、而してのち弟子たちに言い給う『われら復ユダヤに往くべし』弟子たち言う『ラビ、この程もユダヤ人、なんじを右にて撃たんとせしに、復かしここに往き給うか』（ヨハネ11：3～8）

非常にイエス様の身辺は危険に満ちている。ですから、弟子たちはラザロの処へ行くことを本当に心配しました。けれども、主はどうしても行く、ラザロの処へ危険を犯してでも行くと言われる。では我々も腹を決めて一緒に死のうではないかと、そのように非常に緊迫した場面です。その中でおっしゃっている主の言葉はとても印象的です。

「イエス答えたもう『一日に十二時あるならずや、人もし昼あるかば、此の世の光を見るゆえに躓くことなし。夜あるかば、光その人になき故に躓くなり』」（ヨハネ11：9～10）

禅問答みたいですね。この中でこれはどういうふう位置付けられるのか、読んだところ分らない。我々の日常生活の中では昼は明るい。夜は本当に暗い。夜歩けばいろいろな躓きがある、昼間に歩けば大丈夫だよ。このごろ、我々の生活は夜と昼があまり区別がつかなくなってしまう。ネオンが輝いて夜もそれなりの美しさを醸し出すけれども、この当時は夜は星の光しかなかった。本当に躓きます。それで、主さまは次のようにおっしゃった。

「私は世の光だ。私の中には神の光が輝いている。私の内に光がある。神様が私から光を取り上げられたら、そのときは闇だ。しかし神様が私と一緒にいらつしやる間は、常に夜も昼の如く輝いているから心配いらぬ。光のある



間にこの光をしつかりと受けとり、私を信じてついていらつしやい」

と。ラザロの処に行こうとなさっているのは、はっきりと神の御旨に従って行こうとなさつていらつしやる。でなかったら、このような行動はなさらない。

「ラザロは死んだ。しかしあそこに私がいなかったことをかえって喜びとする」

と、キリストは言われた。十字架の本当に直前の出来事で、しかもものすごいことをこれから主は示そうとなさっています。

「かく言いて復^{また}その後いい給う『われらの友ラザロ眠れり、されど我、よび起こさん為に往くなり』弟子たち言う『主よ、眠れるならば癒^いゆべし』イエスは彼が死にたることを言い給いしなれど、弟子たちは寝^いねて眠れるを言い給うと思えるなり。ここにイエス、明白^{あらわ}に言い給う『ラザロは死にたり。我かしこに居らざりし事を汝等のために喜ぶ、汝等をして信ぜしめんとてなり。されど我ら今その許^{もと}に往くべし』デドモと称うるトマス、他の弟子たちに言う『われらも往きて彼と共に死ぬべし』」（ヨハネ11：11～16）

そして、現実に行つてご覧になりますと、さすがに大変です。マルタが人を遣わして「早く来て下さい」と言つたのに、主はなお二日、向こうに止^{とど}まつておられました。それからおいでになったものだから、時すでに遅しです。もうラザロは墓^{はうむ}に葬られて四日経^たつていて、臭くなっている。ラザロのことでマルタとマリヤを慰めようと、たくさんの方が集まっていました。やつとおいでになったと聞いてマルタは直ぐに立ち上がりました。マリヤはじつと考えこんでいました。

「マルタ、イエスに言う『主よ、もし此^こ処^こに在^{いま}しならば、我が兄弟は死なざりしものを。されど今にても我は知る、何事を神に願ひ給うとも、神は与え給はん』」（ヨハネ11：21～22）

我々の生活には、「もし」ということがたくさんあります。もしあの時こうだったら、もしあの時こうしていたらとか、それが絶えず後悔の念を呼ぶ。そして特にそのことによつて子供を傷つけたとか、子供を失ったとか、いろいろなことがありますと、そのことで自分を責めます。我々だったら、もしあの時もつと神の力が強く働いていたならばとか。しかし、このマルタは自分を責めたのではない。

「主よ、もし此^こ処^こに在^{いま}しならば、我が兄弟は死なざりしものを」

「主よ、あなたがいらつしやらなかったのが本当に今は悔いられます、もつと早く来ていただきたいかったのに」

という思いが溢れでました。しかしマルタはまだ絶望していない。

「とにかく主さま、あなたは来て下さいました。今からでも遅くはないです。主よ、お願いになつて下さい」



「イエス言い給う『なんじの兄弟は甦るべし』
これはまたマルタの意表をつくようなことをおっしゃった。
マルタ言う『おわりの日、復活のときに甦るべきを知る』（ヨハネ11・23）
24）

●主にある生命は永遠

「父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終
の日にこれを甦らすべし」（ヨハネ6・40）
そうなのですね。主は、

「私は永遠の生命を与える。私は生命のパンである。私を食べる者は永遠に死
なない」

と、繰り返しておっしゃっています。いつも6章の中では永遠の生命、これは終わりの日の
甦りということと結びついて語られている。私はこの6章を読んでいるときに、それは若
干不満でありました。

「終わりの日ではなく、主さま、今ですよ。今既に我々は甦りの生命の質をいただ
いて、それが終わりの日に完成されるのですよ」

と、現在のこととして読みたかったのです。

「わが天より降りしは我が意をなさん為にあらず、我を遣わし給いし者の御意
をなさん為なり。我を遣わし給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我
その一つをも失わずして終の日に甦らす是なり。わが父の御意は、すべ
て子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり。われ終の日にこれを甦ら
すべし」（ヨハネ6・38）（40）

このように

「永遠の生命は、父の御意だ。私は一人も失わず終の日に甦らせる」

と、ここで約束なさっています。ですから、マルタもここに

「なんじの兄弟は甦るべし」

と主がおっしゃったときに、

「はい、そうです。終わりの日に甦るべきことを私は信じています」

とお答えしました。ところがイエス様は、

「イエス言い給う『我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。
凡そ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし。汝これを信ずるか』（ヨ
ハネ11・25）（26）

と。これはもう終わりの日の甦りどころか、

「もう既に今だよ、私に出会う者はこの甦りの生命をいただいてしまっているのだ、



死なないのだよ」

と言われているのです。皆さん、どうですか。こんなふうの主から、

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん」

と言われたら、どうですか。だって、体はやはり死ぬではありませんか。我々の先輩で信じていった者も全部死んだではありませんか。

「こんな聖言はちつとも本当ではない」と、経験で受けとらないで下さい。イエス様がおっしゃった言葉は、先入観を捨てて、全的に受けとることです。

しかし、全的に受けとったことは、現実にはそうなっていないですね。では、これは何を語っていたらしゃるのだろうか、次の段階に入ります。「現実と合わないからどちらかが間違っている」と決して思わないで下さい。

あの五つのパンと二匹の魚もそうですね。一回きりあんなことをなさったって、「その後何回も繰り返して行われなかったら全然意味がない」というふうには受けとらないで下さい。

イエス様はことごとく一回きりのことを通して永遠なることを教えておられます。

あの、カナの婚宴で水が葡萄酒に変わったのも（ヨハネ2・1）、ラザロの甦りも、五つのパンも一回きりのこと——もちろん、あとで四千人の人に同じようなことをなさっている（マタイ15・32）——そのときそのとき、主のなさっていることは一回きりのことです。それを通して永遠なることを我々に語っておられるのです。それをしつかりと受けとっていくこと、しかも受けとり方は年と共に深くなります。「一回こう解釈した。こう受けとった。そしてあの時非常に満たされた。だからそれでよい」ということではありません。繰り返して、それは深められていきます。

●ラザロの復活

「彼いう『主よ然り、我なんじは世に来るべきキリスト、神の子なりと信ず』」

かく言いて後ゆきて、窃にその姉妹マリヤを呼びて『師きたりて汝を呼びたもう』と言う。マリヤ之をきき、急ぎ起ちて御許に往けり。イエスは未だ村に入らず、尚マルタの迎えし処に居給う。マリヤと共に家に居りて慰め居たるユダヤ人、その急ぎ立ちて出でゆくを見、かれは歎かんとて墓に往くと思いて後に随えり。かくてマリヤ、イエスの居給う処にいたり、之を見てその足下に伏し『主よ、もし此処に在ししならば、我が兄弟は死なざりしものを』

と言う。イエスカれが泣き居り、共に来りしユダヤ人も泣き居るを見て、心を傷め悲しみて言い給う、『かれを何処に置きしか』彼ら言う『主よ、来りて見給え』イエス涙をながし給う（ヨハネ11・27～35）

本当に主さまは、泣いている人の心がそのまま自分の心になってしまってお方なのです。「イエス様がこれからラザロを甦らすならば、なぜ泣く必要があるのかね」と人はそう思います。



そんな頭の判断ではなく、イエス様はその相手の人の姿に成り切ってしまったられるお方なのです。マリヤの悲しむ心に主は本当に一つになってしまわれる。だから、涙を流しておられる。

「愛」というものは、その人とそういう意味で本当に一つになってしまう。イエス様は一つになって、相手を抱き取って天界へ引き上げてしまわれるのです。我々は相手と一つに成りっぱなしで、そこから先はできませんが。

十字架の盗賊の場面でもそうでした。

「私のことをせめて覚えて下さい」

と、言った十字架の片一方の盗賊の心に成り切って、

「今日、お前と一緒に地獄まで行くぞ、そして私と共にパラダイスだよ」

と言われました（ルカ23・39）。その傷んでいる人の所へ行って、その人の姿に成り切ってそれで終わっていたら、二人とも共倒れです。慰め合いはできましようが、それだけです。しかし主さまの愛はそこからそれを担い上げて、天界に引き上げていかれる。その引き上げていかれる中に生命が漲ってくる。そのときに不思議なことが起こってくるのです。だから私たちもお見舞いするときも、本当に人間らしく、傷みは傷みとして、本当にその人の心を心として、時には一緒に涙を流す。涙を流し、手を握りながら、

「しかし、主さま、今ここにあなたが来て下さっているのですから、大丈夫です。

主さま、あなたは今、何かをなさいます。いや、あなたが来て下さったことが既に勝利です」

と。こう祈り心で手を握って、本当に心の中でじつと祈って下さい。声を出して祈る必要はありません。そうしたら、その握っている手から主さまの生命が流れていきますから。私はある姉妹をお見舞いしたとき、彼女はクリスチャンではなかったですが、病院へ行つて手を握ってそのような思いで祈りました。二回目くらいからは声を出して祈りましたけれど、初回の時は本当に手を握ってただ祈りました。

「イエス涙をながし給う。ここにユダヤ人ら言う『視よ、いかばかり彼を愛せしぞや』その中の或者ども言う『盲人の目をあけし此の人にして、彼を死なざらしむること能わざりしか』（ヨハネ11・35〜37）」

生まれながらの目の見えない人を主は癒されました（ヨハネ9・1）。あの時にも

「誰の罪でもないよ、この人の上に神の栄光が現れるためだ」

と言って、目を開けました。しかし、

「あのイエス様にして、ラザロを死なせないわけにはいかなかったのか。やはり神様にもできないことがある。この人（イエス）にもできないことがあるのだ」

と、人々は言ったということです。



「イエスまた心を傷めつつ墓にいたり給う」（ヨハネ11・38）
イエス様は、

「神には能わぬことなし」

と信じておられますから、人々が「やはり神様でもこれはしようがないのだなあ」と言っていると、本当に心が傷むのです。この「傷めつつ」というのは、ある学者によれば、「憤りて」と解釈をしています。すなわち、神様のお力に対する信頼に限界をおいてしまう人の心に対する憤り、あるいは人をそう思わしめる死という絶望的な刺、

「死は最後だ。死は敵の勝利であり、こちらの敗北だ。死んだらおしまいだ。これだけは勝てない」

と思っている、そういうものに対するイエス様の「義の憤り」と言ってもいいでしょう。

「私は死に勝つ。神の力は死なんかによって封じられるようなものではない」というお気持ちもありましょう。

「墓は洞にして石を置きて塞げり。イエス言い給う『石を除けよ』死にし人の姉妹マルタ言う『主よ、彼ははや臭し、四日を経たればなり』イエス言い給う『われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言いにあらずや』ここに人々、石を除けたり。イエス目を挙げて言いたもう『父よ、我にきき給いしを謝す。常にきき給うを我は知る。しかるにかく言うは、傍に立つ群衆の為にして、汝の我を遣わし給いしことを之に信ぜしめんとてなり』かく言いてのち、声高く『ラザロよ、出で来れ』と呼ばわり給えば、死にしもの布にて足と手を巻かれたるまま出で来る、顔も手拭にて包まれたり。イエス『これを解きて往かしめよ』と言ひ給う。

かくてマリヤの許に來りて、イエスの為し給いし事を見たる多くのユダヤ人、かれを信じたりしが、或者はパリサイ人に往きて、イエスの為し給いし事を告げたり」（ヨハネ11・38〜46）

このイエスの姿を瞑想していただきたい。イエス様の声は高く、

「ラザロよ、出で来たれ！」

と、本当に鳴り響いたでしょうね。四日も経って臭くなって、人間としてのあらゆる望みは絶え果てています。もう、これはどうにもならない状況の中で主は、「ラザロよ、出で来たれ」と祈られた。五千人のパンもすごいですが、このラザロの復活はすごいですよ。生命にかかわる問題です。

「人はパンのみにて生きるにあらず、神のみ口より出づる一つ一つの言葉に由る」（マタイ4・4）

とおっしゃった主はパン自体を問題にしておられません。あの奇跡だって、

「私は生命だよ。私は尽きない生命だ、私という生命を食べろ」



ということをおっしゃっているのです。パンを問題にしておられない。生命を問題にしておられた。

地上の生命、簡単に地上の生命と言いますが、我々の目に見えるのは地上の生命しかないのですから。この地上の生命、ラザロの生命が失われて墓に眠って既に四日も経って、体が朽ち果てんとし始めている、そういう状況の中で、主は祈られて、声高く

「ラザロよ出て来い！」

とお呼びになった。

●生命の御霊の法

はつきりとここにイエス様は我々の見ゆる地上界、現象界——我々が泣いたり、笑ったり、食べたり、飲んだり、いろいろなことを営む生きとし生ける肉の世界——と、永遠の霊界——我々の望み見ることでできない霊の次元の世界、神様の世界——と、この両方をしっかりと掌握しやうあくしておられます。我々が生かされているのは、有限の世界です。草は枯れ、花は萎しほみ、人の齢よわいも長くても70年、80年だと言われています。そういう過ぎ行く世界、はかなき世界、

「そのはかなき世界が実は、はかなくないぞ、主にあつては絶望ということはないぞ」

とはつきりおっしゃっている。主にあつては、「もうだめだ、あるときあだつたら」といつも後ろを振り向いて、後ろに囚とらわれている。そんなものではありません。

「私は前に向かって進み行く。私の内にあふれている生命、これは常に新しい創造だ、新創造なんだ。我々が今まで何千年来、囚とらわれて来たこの既成の観念をぶち破り、本当に新しい事態が始まっている。誰でもキリストにあるならば新しく造られ、古きは過ぎ去った。見よ、一切が新しくなった」

と、その新しいことを皆さん一人ひとりの人生で、一人ひとりの体において主はなさろうとしている。

「ラザロ一人のことではないぞ、お前の問題だよ」

とおっしゃっているのです。神様の定め給うた法則だから、肉体的には死にますよ。しかし、それが何だ。

「私が肉体的に死なないか、そんな問題ではない。そんなものに囚とらわれるな。もつと奥のすごいことを私はしている。このラザロの出来事が現している。絶望はない、闇はないのだ」

と主はおっしゃった。

「私に在つたら夜はない。夜も昼の如く輝く。絶望のない、常に光輝いていく永遠の生命だよ」



という質を私たちの中に下さっているという事態。主さまの十字架と復活、そして聖霊となって我々の中に宿り給うという事態は、それだけのすごい事態を私たち一人ひとりに現に下さっているのです。

それに圧倒されて進んで行く。その原点はどこかと言えば、十字架なのです。古き我はそこに根源的に、完全に葬り去られている。あそこで古い私は吹っ飛び、そこに復活の生命が来ている。

「それを汝は信じるか。今それをあなたが受けとつたらもう死なない。それは永遠だ。何が来ようとそんなことは問題でない。それをお前は受けとるか」

「だけど、見ゆるところは墓に石の封印がしてあって、もう臭くなっているような現実ですよ」

「どうして、見ゆるところに囚われるのか。私はそれを突破しているではないか」

と。痩せ我慢でも何でもなく、本当の現実はそうだとおっしゃった。北海道でひどい地震がありました、この我々の生活で見えているところは、実に不安定な足元がぐらぐら揺れて、立っている場がなくなるような、そんなものかも知れない。しかし、

「私（キリスト）の言葉、私の生命はそんなものでどうなるものではない、永遠だよ」と言われました。皆さんはこれを本当に受けとっていたきたい。いや、主が受けとらせて下さる。主さまが「お前を愛す」とおっしゃったら、何が来ようと、どっちを向いていようとも変わらない。

「お前が私を愛したのではない。私がお前を愛したのだ、捕まえたのだ。もう離さない。これを受けとるか」

とおっしゃっている。受けとらないで背を向けていたらだめです。詩篇27篇に

「主の御顔を仰ぎ望む」

とありますが、

「はい！ 主さま」

と全的に信頼して受けとっていく。私たちの側はそれだけでいい。そうしたら、主さまの愛は貫く。貫いた姿がこのラザロの復活という姿になって現れる。

イエスの母となられたマリヤが「イエス様をみごもる」と天使のお告げを受けたとき、

「私は主の婢女です。我が思いでなく、あなたの御意がなつて下さい」

と答えました。まだ男の人を知らないマリヤの身に何が起こるのか。すると天使は、

「あなたは嬰兒を生む」

と、言われた。神のなさることは分らない。しかし、マリヤは

「主よ、あなたが私を愛して捕まえて、人の思いを越えた何かをなさろうとしている。あなたのみ思いに従います。私は主の婢女です」

と答えた。ありがたいことに主が私たちの中に、あなたがた一人ひとりの中になそうとし



ておられることは、本当に驚くべきことなのです。預言者だけが驚いているのではない。イザヤは言いました、

「天よ歌え、地よ叫べ。主のことを成し給えり」

と。十字架の贖い^{あがな}を歌っているのですが、それは

「あなたの中で驚くべきことが成っていくのだよ」と言っている。

「あなたは神の栄光をみる。神の子のこれによりて栄光を受けんためなり」（ヨハネ11・4）

とありますね。

「神の栄光のため、あなたにおいて神の栄光が現れ、神様は喜んでおられる。神様の栄光があなたにおいて現れる。もう罪の器ではない、義の器だ、喜びの器だ」

と、これが神様の愛の世界です。

私は福音書を読んで、本当にただ一言、語れとおっしゃったら何を語るか。

「神様の愛はこんなにすごい」

と、その外のことは言いたくない。キリストという愛、キリストが愛の固まりなのです。キリストというお方のこの愛を、

「これを飲み、本当にしっかりと食べろ」

とおっしゃった。

「私を食べる者、私を飲む者は、その人の中に永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}があるぞ」

とおっしゃった。永遠の生命とはこういうものです。何が来てもそれによって左右されない。

「永遠の生命」と言うと、我々の生命が「不老不死になっていつまでも死なない」とか考えますが、そんなレベルで捉^{とら}えないで下さい。ラザロだって後はやはり死ぬ。自然の法則に従って死にます。しかし、それを突破してそれ以上のことを主は我々一人ひとりに下さっているという霊的現実なのです。だから、実に我々は不可思議な存在です。クリスチャンはご飯を食べなくても永遠に生きるか、クリスチャンは体を鍛^{きた}えなくてもピンピン元氣か、そうではありません。やはり我々は自然法則に従って体も鍛え、食物も取り、睡眠も取りというふうに自然の法則に従って生活をします。

自然の法則に従って生きながら、その中にもう一つの高次元の「生命^{いのち}の御霊^{みたま}の法^{のり}」が、同時に入り込んできている。それが時として自然の法則に勝っている。

その時に「ああ、奇跡だ」なんて言う。イエス様が海の上を歩いて来られたというのは、自然の法則をさらに乗り越えて、霊の法則が勝っている姿です。だから、我々は自然の法則に従いながら、しかし、たとえ、自然の法則が死というものをもつて我々の生命を終えんとしても、主さまが宿っておられるときには、それを乗り越えて霊的生命体になってい



ます。

のみならず、我々の日常のいろいろな出来事、例えば、皆さん、仕事で行き詰まること
があるでしょう。私だつて行き詰まります。何か網^{あみ}に足が捕えられて、どうにも先に進め
ない、いろいろな物にがんじがらめになって少しも前に進めない時がある。「このベテランが」
と皆さんは思われるかも知れませんが、本当にあるのです。人はスランプというかも知れ
ません。リズムがくずれているというか、こんなはずではなかったと、いろいろありますよ。
そんなときに詩篇23篇、27篇をこのラザロの復活の心で受けとりたい。

「私だよ」と、主が

「私だよ、私がお前と一緒にいる。私のこの永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}をもつてお前の中に宿つて
いるのだよ。八方ふさがりでも天は開けている。必ず道は開ける。明日のことを
思い煩^{わづら}うな」

と、主はおつしやっています（マタイ6・34）。本当にそうなのです。

「二日の苦労は一日で足り」と。今日一日、主さま、私を生かして下さい。主さま、
あなたが私の主であつて下さい」

と。そして、どんなことにおいてもなのです。ここだけが例外という場所はない。プラス
もマイナスも全部なのです。「主の愛」というものは、プラスもマイナスも全部飲み込んで、
それを変質^{へんぎ}変貌^{へんぼう}させて下さる。その極まりがラザロの四日も経^たつて臭くなつた生命を変貌
させて下さったことではありませんか。だから、我々のどんな行き詰まりも、どんな解け
ない問題も、全部この質で主は変貌させて下さるのです。

「われ汝に、もし信ぜば神の栄光を見んと言ひしにあらずや」

と。

「お前も神の器だ、お前も私が愛している器だ。信ぜば神の栄光を見る」
と、言われたではありませんか。

信仰とは何かと言えば、この神様の愛を100%受けとることが信仰なのです。神様がこん
なにまで私を愛して下さっている。皆さん一人ひとりが本当に体で受けとる。それが信仰
ということなのです。必ず平安があり、喜びが湧き、必ず道が開けてきます。

「ありがとうございます」

という気持が本当に泉のごとく湧いてきます。そういう目で、ヨハネ伝をご覧になつて下
さい。素晴らしいですよ。サマリヤの女との泉のほとりでの話し（ヨハネ伝第4章）もそう
です。この地上の自然法則、社会法則の中での出来事というものは、

「すべて此の水を飲む者は、また渴^{かわ}かん」

というものです。

「すべて此の水を飲む者は、また渴^{かわ}かん。されど我があたらうる水を飲む者は、
永遠^{とこしえ}に渴くことなし。わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}の水



湧きいづべし」（ヨハネ4・13〜14）

という。

● 神の作品

「何がきてもびくともしない、突破していく力が与えられるぞ。それが湧きいづるぞ」

と、それを無条件で下さっています。この「無条件」ということを、忘れないでいただきたい。私がおかしいことをしたからとか、私が善良な人間だからとか、私が20年も親孝行をしてきたからとか、そんな条件は何もついていません。

「不公平ではないですか。私は20年親孝行をしてきた。この弟は親不孝なのです。

でも一緒に扱われるのですか」

と言って神様にくってかかっているのが、放蕩息子ほうとうむすこの話です（ルカ15・11）。兄のほうは20年親孝行をしてきた。弟の放蕩息子は散々身代を食いつぶして、みじめな姿で帰ってきた。けれども、放蕩息子のどこをお父さんは喜んだか。「砕けの心」です。

「お父さん、すまなかった。本当に私が間違っていた。息子と呼んでいただく

資格はありません」

という、「砕けの心」なのです。しかし、この「砕けの心」も究極は十字架にぶつからなければ出てこない。十字架で本当に、砕かれ得ざる私が砕かれているという霊の現実を、この砕けを無条件で下さっているのです。すべて無条件で下さっている。

それにぶつかったら、全身、涙ですよ。理屈ではなく本当に全存在が変わります。そこから新しいことが始まっていきます。

「我を仰ぎ見よ」

とおっしゃる、その十字架が光っています。そこから光がさしてきます。

「お前は新しくなっているよ」

それが本当の死生の転換ですね。自分で悟って大死たいしいちばん一番「一度立派に死んだつもりになって頑張ること」といって、古い自分を捨てられるものではない。エゴイズムなんてどんなに神様の前に誓っても、変えられるものではない。

「本当の死というのは、十字架で私は死んでいる。あそこで古き我は徹底的に死んでいる」

という事実を事実としてありがたくお受けする、それだけです。十字架から目を離したらだめです。十字架はαあるふあ（始）にしてωおめが（終）です。

「我もはや肉において人を知るまじ」

と、パウロは言いました。今日、司会者が

「原点に帰れ、始めに帰れ」



とおっしゃった。私の原点も十字架の絶対恩寵^{おんちよう}。過去・現在・未来、全部の私を根源的に贖い切つて下さった十字架です。

本当にありがたい。そこなのです。そこから始まります。そしてこの聖書のみことばを読むときにありがたくてありがたくて、本当に勇気が出てくる。この魂のみずみずしさというか、魂の若さ、これはみことばから来る。そのように受けとって読むことが本当に読み入る、みことばの中に入っていくことです。そうしたときに

「我が与うる水は彼の中にて泉となり、永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}の水湧^わきいづべし」

と、主さまが湧きいでて下さるのです。自分で自分をどうかしようと、絶対に思う必要はない。主さまが我が中^{うち}に成し給う業^{わざ}なのです。

「神^{わが}の業はその遣^{つか}わし給える者を信^{これ}する是なり」（ヨハネ6・29）

とおっしゃいました。

「神の業とはお前の中において私が成す変化なり」

と。

「イエス答へ給う『わが父は今にいたるまで働き給う、我もまた働くなり』

主の愛は働いて止まない。

『父の死にし者を起こして活かし給うごとく、子もまた己が欲する者を活かす

なり』

主は活かし給うお方です。サタンは人をさばき殺します。

『父は誰をも審^{さば}き給わず、審判^{さばき}をさえみな子に委^{ゆた}ね給えり』

主は我が受けるべき審判を全部お受け下さいました。もはや裁かれない。

『誠にまことに汝らに告ぐ、わが言をききて我を遣^{つか}わし給いし者を信する人は、

永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}をもち、かつ審判^{さばき}に至らず、死より生命^{いのち}に移れるなり』（ヨハネ

5・17〜24）

この「永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}」ということが、さきほどから話していますように、何がきても微動だにもしない、常に道を開いて前進して行くという質です。もちろん、ヨハネ伝で永遠の生命というときは、

「終わりの日に甦^{よみがえ}らせ給う」

という永遠の生命ですね。この地上の生命がいつまでも永^{なが}らえることではなくて、質的に新しい霊の生命、そして終わりの日の復活の生命といったことを指しています。私は、さらに突き抜けたことを申し上げているわけです。ラザロのあの場面で主がおっしゃった角度から、申し上げている。聖書のみことばというのは決して一つの意味に限定して、閉じ込める必要はない。さらにそれが、パカッと殻^{から}が破れてパーと光を放つような受けとり方をなされればいいわけです。私はそのように迫られたから、告白している。絶望ということはない。もうだめだということはありません。さつき司会者が、



「私たちの願いが聞かれたか、願った通りの形で聞かれたかどうかではない。その願いにおいて主さまに出会っていることが大切なのだ」

と、証されました。主は最善を成し給う。「それが聞かれなかった。願ったようにならなかった。だから信仰なんてつまらない」なんて、それは我が思いです。

主は常に最善を成し給うのです。本当に人の思いを越えて成し給う。だから

「思い煩^{わづら}うなかれ」

と言われる。

前回、星野富弘さんの「鈴の鳴る道」を読んで感動した少女のお話をご紹介しました。星野富弘さんはどうしてあんな目にあつたのだろうか、人には分からない。でも神様は最善を成しておられる。万事を益と成らしめ給う方です。それから、『エン・クリスト』53号（1993年1月冬季号）にIさんのお嬢様のことがでていました。本当にIさんのご家庭に、なぜあんなことが臨んだのか、どうしてあそこまで子供さんを不幸な目に合わせなければならぬのだろうか、これは我々の思いですね。しかし、Iさんはそれを通して

「神が最善を成し給う。神は愛なりと本当に知った」

という。Iさんでなければ言えません。一人ひとりにおいてそれは他と替えがたい、その人でしか味わえない、その人でしか告白できない、のつぴきならない体験を主は成さしめ給う。ベルトコンベアに乗って同種の物が幾つも作り出されている、工場生産品ではない。一人ひとりが神様のみ手の作品です。一人ひとりがその人でなければ歩けない道を神様はご用意下さっているのです。

そして主さまは愛です。愛の主さまがあのご自分の生命を捨てて活かそうとおっしゃって下さるのに悪いことをなさるはずがありません。主さまがなさって下さることは常に最善です。今分からなくても、必ず素晴らしく光輝く道へと我々を導き、我々自身を作り変えようとなさっていらつしやる。もう我々には闇^{やみ}はないのです。

「見よ、光が闇の中で輝いている。闇はこれに勝たなかった。闇は知らなかつ

たけれども、光は闇に勝ってしまった」（ヨハネ1・5）

「夜も昼のように輝く」（詩篇139・12）

とあります。クリスチャン自身が本当にこのように光輝いていなかったら、世の人にキリストは素晴らしいと告白できないですよ。思い煩^{わづら}って心配ばかりしている人間が、

「主は愛ですよ」

と言つても人は信じない。我々は奇跡を起こさない。御利益を約束しない。我々は、あつと人を驚かすようなことは何一つしない。それでいて

「やつぱり、イエス・キリストって素晴らしいなあ」

と、どうして人が思えますか。それは、我々が本当に生命の喜びに、愛の喜びに輝いている以外にないのです。道徳的に立派で輝いているのではない。



クリスチャンは聖人君子になる必要はなく、人間臭くてけっこうです。

「人間らしい人間、それでいて本当に慕わしい存在、それが神の愛なのだ。イエス様という方は、こんな慕わしいお方だ」

ということが私たちの体に成っていかなかったら、人は見てくれないではないですか。自分はそのなっていると自覚したらだめですよ。無自覚でいい。前にも言いました。バラは美しい、でも自分の美しさを知らない。野の花は美しい、しかし自分で美しいよと言って咲いているわけではない。野の花は太陽の光を浴びて精いっぱい生命いのちしている。子供さんの姿が生命している姿なのです。我々は人々に対して、また、家庭においても、「かくあらねばならない」とあまり言わない方がいい。あまり言ったら、

「お父ちゃんはできてないではないか」

と、子供さんはかえって反発します。

「私の無言の姿を見て下さい」

と、心の中でひそかな自負心を持つていらしたらよい。それは

「主を誇る」

という、

「主は我が牧者」

という自負心です。

「私には主がついておられるから、ちょっとやそつとでは倒れないぞ」

という、烈々たる闘志を内に秘めておられたらいい。時がきたら、爆発します。

「ああ、やはりあの人は違ったなあ」

と、認めてくれるのに5年、10年かかってもよいではないですか。何があの人の原動力なのだろうかと。

「あなたの原動力は何ですか？」

「はい、私の中に主が宿っています。私を主は活かして下さっています」

「なるほど分かりました。そうだったのですか」

と。そういうことで本当に私たち自身が生きた聖書に、

「活けるキリストが我が中に宿り給う」

という姿になりたいですね。

●主は我が牧者なり

「人もし渴かば我に来りて飲め。我を信する者は、聖書に云えるごとく、その腹より活ける水、川となりて流れ出づべし」(ヨハネ7・37-38)

主が我々の中で永遠の泉となつて下さり、み霊という水が流れ出す。それから、

「われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」(ヨ



ハネ8・12)

「わが羊はわが声をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従う。我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に亡ぶることなく、又かれらを我が手より奪う者あらじ」(ヨハネ10・27、28)

みんな主さまが保証して下さっている。こちらの信仰ではないのですね。主さまがこんな愛をもって、

「私が彼らを捕まえています。決して彼らを私の手から奪うことはできません」と言って下さっています。そして、

「誠にまことに汝らに告ぐ、一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」(ヨハネ12・24)

これは主が生命を捨てて下さったことを指していますが、今度は我々一人ひとりが一粒の麦となる。生まれながらの肉なる我はただ一粒ですが、この十字架で私たちは既に砕かれ死んでいます。そのことに気付くなら、聖霊は豊かな果を結ばして下さいます。私という一粒が十字架で死ねば、今度は多くの魂をキリストの救いへと導きます。こうして主は、一つの魂から多くの魂を生み出して下さいます。

「己が生命を愛する者は、これを失い、この世にてその生命を憎む者は、之を保ちて永遠の生命に至るべし。人もし我に事えんとせば、我に従え、わが居る処に我に事うる者もまた居るべし」(ヨハネ12・25、26)

「私から離れたらだめだよ、本当に私の愛の中にいなさい」

と。「己が生命を憎む」というのは、

「常に十字架で私は死に葬られています。生の自分は問題にしません。本当に主の与え給うた永遠の生命、新しい霊の生命、新創造の生命、これだけを尊んでいく。賜りたるものですから、私のものではありません」

と言つて限りなく乗り越えて行く姿です。

「なおしばし光は汝らの中にあり、光のある間に歩みて暗黒に追及かれぬようにせよ。暗き中を歩む者は往方^{ゆくて}を知らず。光の子とならんために光のある間に光を信ぜよ」(ヨハネ12・35、36)

イエス様から目をそらしたら、我々は闇の中をさまよいます。イエス様だけをじつと見ていれば、十字架を通してしっかり見ていれば、それは愛の光の中です。その光は夜も昼のごとく輝く光です。生命の光、愛の光。だから、申し上げたいことは一つですね。主さまがすべてです。

「主は我が牧者なり、われ乏しきことあらじ。」

主は我をみどりの野にふさせいこいの水濱^{みぎわ}にともないたもう。

我死のかげの谷を歩むとも禍害^{わざわい}をおそれじ。



主よ、なんじ我と共に在^{いま}せばなり」（詩篇23篇）
「主よ、なんじ我が中^{うち}に在^{いま}せばなり」
と。

「主は我が光なり、我が生命の力なり」（詩篇27篇）
キリストはこの詩篇23篇、27篇の心を、ラザロの事実を通して我々に語って下さっているのです。

「お前にはもう、絶望だとか、行き詰まりだとか、もうだめだとか、そんなことはあり得ない。あの死でさえも、お前を否定することはできなくなってしまった。一切は相働きて益となっていくよ、絶対のプラスだ。こんなすごいことがあるうか。我が愛に居れ、我が愛に居れ」ということです。

〔奥田昌道先生講筵2『主は我が牧者』1994年12月24日発行より転載〕

